



## 巻頭言

# 私の意識変革

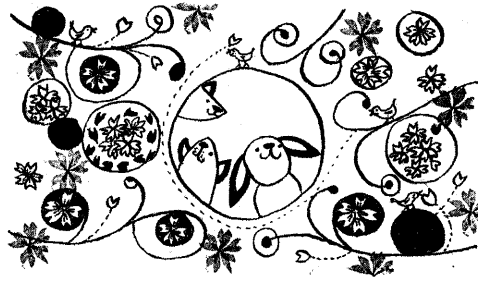
千羽喜代子

世に生命なく力なきもの惰性の如きはない。それが仮令よき内容をもっているも、惰性化するまでに古びたものは、その内容に於ても、必ず考え直しの時期に迫られている。

よくもまあ旧態依然としていられると思う。よくもまあ無再考がつづけられるものだと思う。中味のよし悪しよりも、余りの定型と伝襲性に驚く。——これでは、先ず誰よりも子どもたちがたまるまい。硬化と弛緩ほど子どもの大嫌いなものはないからである。

ゴムが黴臭くこちこちと固まってしまっている球、気が抜けてたるんで少しも弾まなくなってしまう球、流石に子どももうんざりさせられるであろう。

古ぼけたゴム球は取りかえてやればいい。惰性化した教育は内から弾力を盛りかえすほかはない。教育は子どもに与えるものである。自らを新たにする努力を欠いた教育を与えるほど、子どもに気の毒のことはない。むしろ無残である。



右の文章は倉橋惣三先生が、「自らを新たにする努力」と題して書かれた短文である（『倉橋惣三選集 第三卷』フレーベル館 五十三頁）。

教職歴三十五年にある者にとつては、自戒の意味を込めて座右に置きたい文章である。

ところで、私たち教師が授業において黒板を最小限度に使用することになったとしたら、私たちはどのように対応するであろうか。実は、私はこの半年間、この課題に立ち向かったのである。その理由から述べることにする。

当節では、どちらの大学でも実施しているFaculty Development (F.D. 教育内容・方法の改善の向上への取り組み)の研修会で、社会が求める専門的知識と幅広い教養を身につけた思考力・問題発見・解決力のある学生を育てることを目的とした授業方法が検討されている渦中に入ったとき、私は約二〇項目程度の具体的な授業進行の中から一つを選択した。それが黒板の使用であった。板書の字が下手で、読みにくいということが、その選択の理由である。

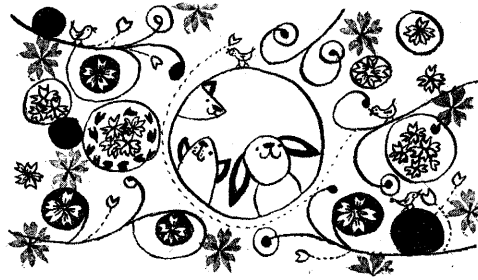
それまでは何の疑問をもつこともなく、黒板に板書することを主体として授業を進めてきた。しかし、「黒板の使用を最小限度にし、むしろ教師ではなく、受講している学生に使用させる」と、自分の中で決めるとき、改めて黒板にのみ依

存して授業を進めていた自分に気がついたのである。

そこで講じなければならぬ方法として、①学生たちに伝えたい担当科目に関する情報や知識の伝達・方法を「何によって」「どのように」行うか ②学生を授業の主体者にするには「どのような方法をもって授業を進行すればよいか」を中軸に置いて、授業の毎時間は静かな格闘のときであった。教材や授業時間の配分に考慮し、学生たちを「どこで」「どのような方法で」授業に参加させていくかなど、準備にかなりの時間を要した。第三者から見れば、この程度のものかと評されるかもしれないが、私としては精一杯の努力であった。たとえば、机間巡視や学生との対話の必要性は充分にわかっている、七十歳を越えたこの老体には、かなりの重労働である。

しかし、この実践から大変に貴重な賜物を頂いた。

①黒板使用中心の授業は、何と、教師主導の授業になりやすいこと。受講生の理解、興味・関心、考え方などを考慮するよりも教師の意図が優先して授業が進められていたこと ②学生を授業の主体者とするための授業方法、授業内容を真剣に考え始めたこと ③充分ではないが、これまでよりも学生の興味・関心や理解度がわかり始めたこと ④現在、本学に就任して二年半になるが、過去二年間の私の授業に対する学生の評価は、「授業が難しい」という声が三分の一だった



のが、その声が消え、「頑張ってください」というエールを送ってくる学生が現れたこと。

今後の私の課題は、如何に授業内容の質を落とさないで、この状態を進めていくかにある。反省としては、学生に専門知識を学習させなければならないとはいえ、盛りだくさんの知識を与えてきたように思う。私の講義内容は彼らの頭上を通り抜けていたのであろう。高等学校を卒業して間もない、入学したばかりの学生に対しての配慮が欠けていた。将来、保育者として子どもたちの保育・教育に携わる者たちの基礎をつくるために、レベルを落とすことなく、わかりやすい授業を行うには、まずは講義内容の精選から始める必要がある。そしてまた一方では、教育する側にある者として、相手を学習の目標に向けて「方向づける」ことが求められる。「何を」「どのように」方向づけるか、模索が続くであろう。

授業の中で、子どもたちと触れ合い、子どもたちの気持ちや状態や状況を充分に理解することから保育は始まると話している私自身が、教育の対象者である学生を抜きにした授業展開をしていた状態に対して、冒頭に引用した倉橋惣三先生の文言を引くならば、まさに、「考え直しの時期」に迫られていたのである。私の自らを新たにする努力は、学生との共同の下で地道な歩みを進めていくことにある。

(東京福祉大学)